

氏名	ZHOU, Yu
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲第245号
学位授与年月日	2024年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	村上春樹作品考——身体観を中心に—— (A Study of Haruki Murakami's Works: With a Focus on Bodily Experience and Sensuous Perception)
論文審査委員	主査 教授 菊池秀明 副査 准教授 園山千里 副査 教授 佐野好則 副査 名誉教授 ツベタナ I. クリステフ

論文内容の要旨

Zhouyu (周鈺)さんの論文(261頁)は、村上春樹作品の「開かれた」構造を身体というキーワードを用いて解明するものである。第一章では中国大陸及び台湾における村上作品の受容について分析し、都市部の若者を中心に熱狂的な流行を生み出した理由について分析した。また表紙のデザインに代表される独自性を取り上げ、読者の様々な読み方を可能とする構造を持っている点を指摘した。

第二章は村上作品の「開かれた」構造を、日本語の特徴に関連づけて考察している。村上は豊かな表現力を持つ一方で、意図的に漢字表記や仮名表記、ローマ字表記を使い分け、自由度の高い表記体系を通じて曖昧な部分を残すことで、読者の多様な読みを生み出したと結論づけた。

第三章は村上作品が提示する感覚の世界について分析を進めた。村上は視覚的な描写において触覚を活かすことで統合的な「血肉のある言葉」を達成している。聴覚についても反復や対句の使用によって整合性のあるリズムを作りだした。またオノマトペを導入して音声の異質感を引き立てたり、味覚に言及することで小説世界の現実性と非現実性の境界線を曖昧にしている。そして五感

および季節感の描写から読者に細かい感情の共鳴を呼び起こすことに成功したと結論づけた。

第四章は村上の代表作の一つである『ノルウェイの森』を取り上げ、バタイユのエロティシズム論を用いて性的描写の表現方法とその効果について考察した。村上自身はバタイユに親近感を持っている訳ではないが、作中ではやや異質な性格を持つ人物造形のシンボルとしてバタイユの名前を挙げている。また作品の表紙に見る赤と緑のコントラストは禁止、タブー、死と生といったエロティシズムの中核的な概念とつながっている。いっぽう性的描写は婉曲的な表現を用いることで「開かれた」構造を支える美的感覚を表現しており、禁止と侵犯といったエロティシズムの核心的な要素と結びつくことで、登場人物に対する治癒の役割を担っていることが確認された。ここから村上の肉体を重視する観念が読み取ることが出来ると述べている。

第五章は『騎士団長殺し』のセクシュアリティについて分析した。この作品が出版後、香港で「わいせつ図書」として認定されるなど波紋が広がったが、ここではいくつかの性的描写をピックアップして描写方法から作品の展開への働きかけまで幅広い視点から検討を進めた。作品は様々な性描写が描かれるいっぽうで、性に関するメタファーやその延長線上にある免色のホモセクシュアリティが示唆されている。また雨、鳥などの表象を用いた間接的な書き方によって読みの可能性を広げると共に、穴のメタファーは免色の人物像を複雑化させるための補足となっている。これらの描写方法は性的描写自体の充実度を向上させるにとどまらず、物語全体の進行を加速させる役目も担っている。そして作品は性的な描写にとどまらず、明確な結末を出さず読者の理解や想像に任せる「開かれた」構造を持っている点で村上作品の特徴をよく示していると結論づけた。

結論では上記の内容を踏まえ、村上作品が一種の文化的象徴となり、読者の生活に影響を与えている理由がその「開かれた」構造にあることを確認した。村上は欧米文学の薫陶を受けながらも、日本人としてのアイデンティティを意識しながら日本語を使用し、創作活動を行っている。彼は作品世界において日本語の表記体系の柔軟性及び日本文学の曖昧さという特徴を生かし、漢字や仮名の使い分けを通して多様な読みを孕む土壌を用意している。また村上は創作活動において身体の役割を重んじながら、日本の美意識から影響を受けており、異なる表現技法を駆使し、人間のあらゆる感覚に訴えかける態勢を整えている。そこには「日本的なもの」を書こうとする村上の強い念願が一貫して存在する。性的描写に対して、単なる性行為そのものを描くのではなく、入念な情景描写によりエロティシズムに繋げたり、人物の内面の変化を露呈させることで人物像を充実させるという側面が見られる。こ

のように「身体」という枠組みの下で、表記、表現、内容という異なる次元から行われた考察が、村上作品の多様な読みを孕む「開かれた」構造の解明及び村上の文学世界の再認識を促すことにつながると結論づけている。

論文審査結果の要旨

論文審査は2024年1月18日にオンラインで行われた。審査員は本学教員の佐野好則教授、園山千里准教授、菊池秀明（主査）の3名に、長く周鈺さんの指導教員として論文指導に当たってきた本学名誉教授のツベタナ クリスティワ先生を外部審査委員として行われた。

まずツベタナ先生からは、本論文が2023年12月に行われた予備審査の結果をよく踏まえ、優れた内容の論文になったと高い評価が与えられた。各章の内容についても『ノルウェイの森』の表紙に関する考察を新たに行ったことは大きな効果があり、文体の問題や感情、わいせつではない性描写の問題などをよく分析しているとの指摘があった。

次に佐野先生からは「開かれた」作品という場合、どのようなメカニズムで筋書きを決めているのかが重要になるとの指摘があった。また第五章のエロティシズムとくに「穴」に関する部分については、プラトンの「洞窟」の比喻との比較を行うと分析の幅が広がるとの指摘があった。

続いて園山先生からは、日本語が母語ではない周鈺さんが極めて高い言語能力を活かし、大部の著作を書き上げたことへの賛辞が寄せられた。内容も充実しており、とくに註の部分は今後の研究の新たな展開を期待させるものであること、村上の文体は日本語の表現を重視しながらも、「日本」という枠組みを超えた一種の越境の文学であるところにその国際的な影響力の秘密があり、身体論や自然との関連では夏目漱石の『こころ』との比較も可能ではないかとの指摘がなされた。

最後に菊池からは、論文はバタイユのエロティシズム論など理論的にも高度な内容を踏まえたものであるとその努力を評価したうえで、それが従来の村上春樹論とどのように異なり、新しいものであるのかを明示してほしいとの指摘がなされた。

これらの指摘および本人との質疑応答を通じて、本論文は内容的に大変充実しており、論理的にも明確でメッセージ性が高いことが確認された。論文のスタイルには今後微調整が必要な部分があるが、註の内容も充実しており、今後の新たな展開が期待されると判断された。その結果、本審査委員会は周鈺さんの論文が博士学位号を授与するに十分な学術的価値を持つ内容であり、審査は合格との結論に至った。